人生金儲けやない、人儲けや！

「世界が尊敬する日本人100」に選ばれた破天荒な愛と成功の軌跡

アメリカのソース王 吉田 潤喜氏

超過密スケジュールでのハワイ滞在中、ヨシダソースの創設者である吉田潤喜氏を囲んで親睦会が開かれた。開口一番、「今ここに集まっている人たちは偶然で来たのではないで、必然で集まってきたんや！」とエネルギー溢れる歯切れの良い会話にジョークを交え、参加者の心を鷲掴みにし、軽快なトークが始まった。

2003年、米政府機関の中小企業局(SBA)が、50周年記念に選出した全米24社の中に、FedExやインテルなどと並んで「殿堂入り」を果たし、2005年には、Newsweek誌（日本版）の「世界が尊敬する日本人100」に選ばれ、2010年7月にはアメリカと日本の友好に貢献したとして「外務大臣賞」を受賞をするなど、「アメリカンドリーム」を体現した、ヨシダグループ19社を率いる同氏のバイタリティと情熱溢れる人生のサクセス・ストーリーを伺った。

生いたち

京都生まれ。1949年（昭和24年）12月7日に在日韓国人の敬虔なクリスチャンの家族の元で産声を上げる。祖父と両親が、戦時中に隠れクリスチャンとして投獄され、激動の時代を幼い頃に経験する。3代続くクリスチャンの家庭の中で、貧さと人種差別の中をがむしゃらに通り抜け、人生の原動力となる『こんちきしょー魂』と『愛』の芽生えがあったと回顧する。

神様の目

4歳の時に縫針が目に刺さるという思いがけない事故に遭い右目を失明。民族差別に加え、障害に対する壮絶ないじめと闘いながら「絶対に負けるものか！」という強気を身につけ始めた。“強くなりたい”という一心から、中学から空手を習い始める。この事がアメリカンドリームの最初の武器となっていく事は当時はまだ想像もしていなかった。

インタビュー内で目の怪我に話題が転じた時、「この目は神様の目を入れる為に無くしはったんや」“なぜ自分だけが・・・”とグレた10代を過ごしていたある時、高野山のお坊さんに「あんたの目は神様の目を入れる為に取りはったんや、せやからあんたは人の事見れるやろ」と言われた。その言葉に、溢れ出る涙と共にそれまでの自分は流されたと語る。「確かに私は人に騙された事は無いな」と呟くように語られた姿が印象的だ。

憧れのアメリカへ

19歳の当時、大学進学に失敗した吉田氏は自分の将来に二つに一つの選択を迫られる。そのまま日本で誰かの下働きに就くか、強い憧れのあるアメリカに渡って一かハかの大勝負か。その決心は気丈な母親の愛によって背中を押され、羽田発シアトル生きの飛行機に乗り込み、日本を後にする事になる。その渡航費用は母親が人知れず、将来の為にと貯めてくれていたものだった。

アメリカ生活の始まり

たった一人で、現金500ドルを手にシアトルの空港に降り立ち、武者震いと不安に震えるその足で日系人旅行社を訪れ、帰りの切符を現金に変えた。「自分には帰る場所は無くなった」そう言い聞かせ、現金を手に即車を購入。車、プリムスが彼のアメリカでの住まいとなり、その生活はその後7～8カ月続く事になった。強制送還を恐れながらも、働けるところはどこでも働くという生活が続いたある日、アメリカでの一つ目の奇跡が起こる。

皿洗いの働き先で2度目の不法滞在の取締りにあった。“万事休す”今回こそは強制送還で夢破れたり・・・と頭が真っ白になり取り調べを受ける為に取調室へ。そこへ顔見知りの別の審査官が現れ、「この子は私の知り合いよ」という一言で無罪放免となり命拾いをした。この時の審査官は何度も移民局に足を運んでは、グリーンカードの取得方法を教えて欲しいと懇願していた時の審査官だったのだ。彼女の温情がアメリカでの最初の奇跡を生んだのだった。

この出来事がきっかけで、学生ビザを取得して、英語の習得のため学校に通いながら、空手を教える事を職業として道を切り開いていった。

空手と夫人との出会い

空手を職業として道場で指導しながら順調に弟子の数を増やしていくと同時に、この当時パーティーイベントを開催するなどビジネスの才能の一端が発揮されていく。ある日、パーティーで知り合った当時18才の美しく奥ゆかしい夫人に一目惚れし、2週間後にはプロポーズするという猛アタックによって結婚に漕ぎ着ける。現在もおしどり夫婦として子供や孫達に囲まれ仲睦まじく暮らしている。夫婦の道のりは後に続く娘の病気の克服や、ヨシダソースの始まりの影の貢献者として婦人の存在はかけがえのないものになっていく。

空手道場の経営者として、シアトルからオレゴンと活躍の場が変わり、「ヨシダ・メソッド」と呼ばれる独自の警察の逮捕術の考案者として人脈が急速に広がりを見せたことが、後のビジネスへの成功へと導かれて行く事になる。この頃から「ソース王」と呼ばれる吉田氏の快進撃が始まる。

ヨシダソース誕生秘話

ある年のクリスマス前、大不況の煽りでクリスマスギフトを買う余裕がない時、「自家製のバーベキューソースを贈りましょう」と言った夫人の提案が、ヨシダソースの名が世界に広がる第一歩となった。

見よう見まねで、在日韓国人の母親が作っていた焼き肉のタレのレシピをベースに、夫人がアメリカ人好みに工夫を加えたソースが誕生した。吉田氏はみんなの反響から「これだ！」と一瞬で決心をしたと言う。氏のモットーである『決断は10秒』がここでも発揮する事になった。その味と品質の評判が評判を呼び、道場の地下で作り始める事となる。

がむしゃらに走る吉田氏の情熱

今では世界中785店舗ものCostco展開に至るヨシダソース。良い商品も販売が出来なければ意味がない。販路の突破口をどのようにして飛び越えたのか。吉田氏が記憶に残る販売でのエピソードを伺った。それはポートランドのCostco2号店でのデモンストレーションで始まる。ここでアイデアマンの本領が発揮され、子供の頃に京都で見ていた商店街の呼び込みや実演販売で勝負。着物を着て、カーボーイ・ハット、下駄ばきで「寄ってらっしゃい、見てらっしゃい」と“フーテンの潤喜”が誕生する事になり、あっという間に人だかりができてソースが飛ぶように売れた。

「私を突き動かしていたのは、とにかくパッションだった」「苦労なんて感じた事がない。がむしゃらに走っていたら苦労なんて感じる暇ないんや」

その言葉こそ、『人生も商売も目立ってなんぼ』『出る杭になる』を実践させる吉田氏の持つ情熱だ。

挫折

その後、順調に売り上げを伸ばし快進撃を遂げたものの、実際は、4度も倒産しそうになったと語る顔には、危機を乗り越えた自信もさることながら、アメリカの『セカンド・ チャンス』を与えてくれる寛容な社会に対する感謝の気持ちが隠されていた。

「アメリカには失敗をチャンスに変える土壌があり、そのセカンドチャンスが自分を救ってくれた。逆に失敗が多い自分の経験に興味を持ってくれる。何度もチャレンジする姿勢を尊敬してくれるアメリカン・スピリットが自分を助けてくれた」と語る。

ハワイとの逸話

ある時、大問題が発生した。今までの定番ソースと違うパイナップル味の新商品を出したが売れ行きが悪い。冷凍パイナップルジュースの在庫がコンテナに山積みという深刻な状況の中で、『失敗は成功のもと』を地で行くアイデアがここでも発揮され、危機を脱する事になる。調合を変えてラベルをハワイアンBBQソースと変えて売り出したところ、爆発的にヒット。「“ハワイ”という言葉には誰もが憧れる響きがある。これや！」と、ひらめいたことが大きな危機をまた一つ乗り越える事になった。ハワイというネーミングがヨシダソースの暗雲を拭い去ったという事実は、ハワイ在住の私達にとっても嬉しい限りだ。『ピンチに立たされても、ふと見ればそこに別の扉がある』 この言葉が、この後もあらゆる方面でのビジネス展開を成功へと導いた吉田哲学の一つのように思われる。

インタビューの中で、「私は今でも自分はお金持ちと思った事はない。今まで世話になった人達や社会に尽くす事が、これからの人生やと思ってるから」吉田氏の人生哲学に学ぶ事は多く、人生の何に情熱を注ぐのか？どう生きたいのか？それぞれの立場が違っても、一人ひとりの心に迫る、人と人との繋がりの素晴らしい関係性の築き方を学ばせてもらった。

最後に吉田氏の著書である『人生金儲けやない、人儲けや！』の中にある言葉を紹介して締めくくりたいと思う。（本文中P173抜粋）

『I love my self』

『自分が自分の理想像になる』

『人に憧れるのもいいが、その人と同じにはなれっこない。だからまずはこう言う自分になったら自分が自分に惚れるという理想像を持つ事だ。そして自分がそうなるにはどうしたらいいかを考える。自分を心の鏡に映し、本当の自分はどんな姿をしているのか見つめる。そして弱いところもちゃんと見た上で、いかに自分が理想の人物になっていくかを考えるのだ』

拙いインタビュアーの質問にも真摯に耳を傾けて頂き、自分自身の気が引き締まる思いで親睦会場を後にした。 皆さまの新年のご発展とご健康をお祈りすると共に、新しい人生の幕開けとなる事をお祈り致します。

（取材・文 Kei Kinoshita）